Osaka University Knowledge Archive

Title	ドイツの国語教育
Author(s)	渡辺, 格司
Citation	語文. 1952, 5, p. 38-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68399
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ドイツの国語教育

渡辺格司

戦前のドイツの高等学校には八年制と六年制とがあった。前者は国民学校の四年から、後者は六年から進学してくるのだから、それらを合算すると、修業年限はいまの日本の六三三制と同じの十二年である。もっとも、それは一九三三年の改革のときに一年の短縮を行ってゐるからである。何分にもゲーテの晩年の頃から九年制だったものを短縮するのだから、文相ルストも用意周到にやってゐる。高校卒業生の質的低下を来さないように訓令を発して奮起を促すことは勿論であるが、他方には教科課目の変更を行って、質的に教育の方向転換をやってゐるので、生徒の学力を改革前と比較できないやうにしてゐる。かういふ改革だったら、「昔はからだった」と横槍を入れようにも出る幕がないから、改革は成功する筈である。ところで、私は高等学校における国語教育について述べるのであるが、八年制にせよ九年制にせよ、いまの日本の制度にあてはめて考へると、小学校の上級、中学校、高等学校について述べることになる。一八三七年以来ドイツの国語教育は、小学校の上級から九年間にわたって組織づけられた統一性のある人文教育の根幹となってゐるのである。古典語を含めての外国語教育がその支柱をなしてゐたことは言ふまでもない。

第一表

学科＼年級	Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
宗教	3	3	2	2	2	2
国語	2	2	2	2	2	3
羅典	10	10	10	10	10	8
希臘	—	—	6	6	6	6
仏語	—	3	2	2	2	2
地歴	2	2	3	3	3	3
数学	4	3	3	3	4	4
物理	—	—	—	—	1	2
博物	(2)	(2)	—	2	—	—
図画	2	2	2	—	—	—
習字	3	3	—	—	—	—
体操	2	2	2	2	2	2
計	30	32	32	32	32	32

第一表はプロイセンで一八五六年から一八八二年まで採用されてゐた標準型のギムナジウムの教課目と一週間の時間配当を示したものである。年級を示した数字は、日本の呼称とは逆であって、第六級から最上級の第一級へと進学してゆくのであり、第三級より以上はそれぞれ二年間を一学年としてゐたから、第一表は六年制と見えるが、実は九年制である。ギムナジウムは旧制高校の文科に当るも

のであるから語学教育に偏ったところが注目される。小学校の五六年のとき国語は二時間であるが、習字が三時間だから併せて五時間、ラテン語の十時間と合せて、一週間の半分は語学教育に捧げられてゐる。中学校からはギリシャ語が六時間、小学校六年から始められたフランス語が続いてあるので、一週三十二時間のうち二十時間を語学教育が占めてゐる。それは高等学校でも殆ど同様である。この第一表が従来のカリキュラムにくらべて新鮮味があったのは、全学年を通じて体操が課せられたことであった。ドイツの統一に向って国運が進んで行かうとした時代精神の現はれである。

第二表（1882）

	Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
宗教	3	2	2	2	2	2
国語	3	2	2	2	2	3
羅典	9	9	9	9	8	8
希臘	—	—	—	7	7	6
仏語	—	4	5	2	2	2
地歴	3	3	4	3	3	3
数学	4	4	4	3	4	4
博物	2	2	2	2	—	—
理科	—	—	—	—	2	2
習字	2	2	—	—	—	—
図画	2	2	2	—	—	—
体操	2	2	2	2	2	2
計	30	32	32	32	32	32

第二表と第三表はドイツ統一より以後の国威の輝いた時代のものである。ゲーテ・シラー以後の自国の文化財に対する自負心は国威の発揚と共に強く、その現はれとしてギリシャ語とフランス語の学習が一年おそく始められ、ラテン語の時間配当が減少して行った。そして国語の時間が増加したのは当然であるが、しかし後世から見ると、ドイツ文学が最盛期をすぎて亜流作家時代であるのも皮肉である。かくて十九世紀の「世紀末」を迎へたのである。

第三表（1892）

	Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲb	Ⅲa	Ⅱb	Ⅱa	Ⅰb	Ⅰa
宗教	3	2	2	2	2	2	2	2	2
国語	4	3	3	2	2	2	2	2	2
羅典	8	8	7	7	7	7	6	6	6
希臘	—	—	—	6	6	6	6	6	6
仏語	—	—	4	3	3	3	2	2	2
地歴	2	2	4	3	3	3	3	3	3
数学	4	4	4	3	3	4	4	4	4
博物	2	2	2	2	—	—	—	—	—
物化	—	—	—	—	2	2	2	2	2
習字	2	2	—	—	—	—	—	—	—
体操	—	2	2	2	2	—	—	—	—
計	25	25	28	30	30	30	30	28	28

第四表（1901）

	Ⅵ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ下	Ⅲ上	Ⅱ下	Ⅱ上	Ⅰ下	Ⅰ上
宗教	3	2	2	2	2	2	2	2	2
国語	4	3	3	2	2	3	3	3	3
羅典	8	8	8	8	8	7	7	7	7
希臘	—	—	—	6	6	6	6	6	6
仏語	—	—	4	2	2	3	3	3	3
歴史	—	—	2	2	2	2	3	3	3
地理	2	2	2	1	1	1	—	—	—
数学	4	4	4	3	3	4	4	4	4
自然	2	2	2	2	2	2	2	2	2
習字	2	2	—	—	—	—	—	—	—
体操	—	2	2	2	2	—	—	—	—
計	25	25	29	30	30	30	30	30	30

高等学校の第一b級をすますと最上級をやらなくても一年志願兵の資格ができるので、トーマス・マンは最後の一年を履修しないで中途退学したのであるが、彼が通学したのは第三表のものである。第三表と第四表とは従来に比してますます古典語の時間が減少して国語の時間が増加し、同時に体操科が価値的に軽視されてゐる。なほフランス語が第四級すなはち現代の日本の中学校から始められるに到ったこと、小学校では行はれなくなったことも注目に値する。

第五表（1933）

		I	II	III	IIII	V	VI	VII	VIII
I	体育	5	5	5	5	5	5	5	5
II 独逸学	国語	5	4	4	4	4	4	4	4
	歴史	1	3	3	3	3	3	3	3
	地理	2	2	2	2	2	2	2	2
	美術	2	2	2	2	1	1	1	1
	音楽	2	2	2	1	1	2	2	2
III 自然科学	生物	2	2	2	2	2	2	2	2
	化学	—	—	—	—	—	2	2	2
	物理	—	—	—	—	2			
	数学	4	4	4	3	3	3	3	3
IIII 外国語	羅典	6	6	4	4	4	4	4	4
	希臘	—	—	5	5	5	5	5	5
	英語	—	—	—	—	3	3	3	3
V	宗教	2	2	2	2	1	1	1	1
	計	31	32	35	35	36	37	37	36

第五表は根本的な大改革である。習字を全廃したわけは、Sütterlin の考案になる模様のやうな文字を採用し、もはや習熟を必要としなくなったからである。フランス語をやめて英語にかへたのは、二十世紀に於ける欧洲の状勢の変化から来たものであらう。しかし、高校程度の学校でフランス語を全廃したのではなく、第六表に示す如きオーバーシューレ高校を従来のギムナジウム高校と並立して作り、そこで全く新しいシステムを実現し、歴史的な意味をもつギムナジウムに対し、行動的な青年を養成せんとした。それにしても毎週の時間から見れば、国語教育は古典語を入れると上級では約半分を占めてゐる。しかし内訳は古典九時間、英語三時間に対して、国語四時間であって、一見するところ甚だしく国語の時間の増加とも言へないかも知れないが、内容的に見れば、全般に亘って重要視されて来た歴史と地理の五時間は国語の時間の延長と見られないでもない。それについては後述しよう。第六表が従前と比して著しく改革されてゐるのは、時間の配当でなくて、重点の置き方である。体操を体育と改めて筆頭にあげたのは、我国の修身（倫理）のやうな尊重かも知れないが、とにかく体育尊重の現はれである。健

第六表（1933）

		I	II	III	VI	V	VI	VII	VIII
I	体育	5	5	5	5	5	5	5	5
II 独逸学	国語	5	4	4	4	4	4	4	4
	歴史	1	3	3	3	3	3	3	3
	地理	2	2	2	2	2	2	2	2
	美術	2	2	2	2	2	2	2	2
	音楽	2	2	2	1	1	2	2	2
III 自然科学	生物	2	2	2	2	2	2	2	2
	化学	—	—	—	—	3	2	2	2
	物理	—	—	—	2		2	2	2
	数学	4	4	4	3	4	4	4	4
IIII 外語	英語	6	6	4	4	4	4	4	4
	羅典	—	—	4	4	4	4	4	4
V		……（協同研究）……					3	3	3
VI	宗教	2	2	2	2	1	1	1	1
	計	31	32	34	34	36	36	36	36

全な肉体なら健全な魂が宿ると唯物的に解釈したのかも知れない。一年の短縮もまさかトーマス・マンが最上級の無駄であることを証明したからではあるまい。経済的な原因から短期栽培の傾向に便乗したのだろう。

第六表は男子オーバーシューレの教科目であるが、ギムナジウムにくらべて実際的である。ラテン語は劣るであらうが、英語は断然くらべものにならぬほど上手である筈である。ギリシャ語は全く習はないが、その代りには協同研究のところで上級三年間を自然科学かまたは外国語に捧げる。フランス語、イタリヤ語、スペイン語のうち一つを選択することになってゐた。ドイツの少年は小学校四年までは同一であるが、将来ギムナジウムのコースを進むものは、五六年でラテン語を毎週六時間やらされ、オーバーシューレに進むものは英語を六時間やるわけである。ドイツの場合は事実上すでに小学校から出て高校へ入学するのである。日本にあてはめて考へると、中学校ではラテン語が四時間とギリシャ語が五時間、或は英語四時間とラテン語が四時間、高等学校では更にその上に現代の外国語が三時間どちみち加はるのである。私は日本の中学や高校で現在どんな具合に行はれてゐるのか詳細は知らないが、いまの日本の高等学校にうつして考へると、英語のほかにドイツ語かフランス語を必修課目にし、更に漢文を国語から独立させて、日本に於けるギリシャ・ラテンの役割を果させるほか、国語に於て古文に重点を置くことになる。それは教材について調べて見れば判るのである。

国語教育は、国語の特質とその発達に対する理解を得させ、国語に内在する表現力を体験せしめるべき役割をもってゐる。一九三三年の改革は、従来の文法的な分析的な国語教育を、国民性の理解へと限定しようとした。ヒューマニズムでなくナショナリズムが目標である。低学年には、話すことと聞くことの練習、文章の読み方、綴り方の三方面から考慮された。話し方では標準語が基本となったのは勿論であるが、方言も決して軽視されなかったと同時に、言語の混乱を招く外来語は却けられたらしい。聞く練習にはレコード、ラジオ、トーキーを用ひて、大人の表現の模倣を警戒してゐる。読み方には平板な読み方を避けて、表現力のある読み方、即ち、物語る戯曲的な読み方をすすめ、他面には意味ふかい詩や劇を暗誦させてゐる。

高学年に進むにつれて文法、言語学、文体から生徒の語感を明確にし、言語意識を植ゑつけ、分析すると共に綜合する表現力を得させようとする。そこに文献による教育が聯関してくる。文芸作品を読ませるのは第四年級からであるから、日本ならば中学二年からである。試みに大戦前の文芸に関する読本、必読書、推薦図書をあげて見れば、（上段は必読、下段は推薦）

第四年級（中学二年）

シラー「キルヘム・テル」　　ラーベ「黒い樅船」
ほかに読本、　　シュトルム「ポーレ・ポペンシュペーラー」
　　ゴルヒ・フォック「航海は苦し」

第五年級（中学三年）

シラー「オルレアンの少女」　　シュトルム「白馬の騎士」
ほかに読本、　　マイヤー「護符」
　　グリルパルツァー「人生は夢」

第六学級（高校一年）

読本
- エッダ、ザーガ（古代独語）
- ニーベルンゲンの歌（中世独語）
- ホーマー、ギリシャ劇
- ヒルデブラントの歌（中世独語）
- ワルテル・フォン・デア・フォーゲルワイデ
- シラー「マリア・シュチュアルト」
- クライスト「ミハエル・コールハース」

エスキロス「ペルシャ人」または
ソフオクレス「アンチゴーネ」、
クライスト「ヘルマン戦争」または
グリルパルツェル「メデア」、
ケラー「七人の実直者」、

第七学級（高校二年）

読本
- ルッテル、フッテン
- レシングの論文
- ヘルデルの論文
- クライスト「宗教問答」
- グリム及びフンボルト「国民と言語」
- アルント「国民性」
- ゲーテ「ゲッツ」または「エグモント」
- シラー「群盗」または「ルイゼ・ミルレリン」
- レシング「ミンナ・フォン・バルンヘルム

シェークスピーア「ヴェニスの商人」または「マクベス」、
マイヤー「フッテンの最後の日」
または「ユルグ・エナーチュ」
アイヘンドルフ「のらくら者」
または
メリケ「旅のモーツアルト」

第八学級（高校三年）

読本
- シラーの書簡と詩
- ゲーテの詩、論文、書簡
- フイヒテ「ドイツ国民に告ぐ」
- 少年の魔笛、アイヘンドルフ、メリケ、
- シュトルム、ケラー、マイヤー、ヘッベル、
- クロップシュトック、ヘルダリンの詩
- グリンメルスハウゼン「ジンプリチシムス」
- クライスト「ホムブルクの王子」
- ヘッベル「アグネス・ベルナウエル」
- ゲーテ「イフィゲーニエ」
- シラー「ワレンシュタイン」
- ベルチバール抜萃

最上級では特に何を読めと推薦作品をあげてゐない。

ゲーテ「ファウスト」第一部（第二部の若干）

此のほか各学年とも現代作家のものを教師が二作品づつ選んで読ませることになってゐる。これで見ると全文を読ませるべき文芸作品が列挙されすぎてゐる様な気がする。高校生がそれについて試験をされるなら、大抵は落第の憂目を見なくてはならぬだらう。私の想像では実際は読本だけについて国語教育が行はれ、その他の文芸作品は読む生徒もあり、大抵は読まずに通ったのではあるまいか。戦争中に日本に来たベルリン大学の医学生と話をしたことがあるが、たまたまヘルダリンの作品について話したところ全然よんでゐなかった。読本でその詩を習ったことがあると言ってゐたが、丁度その頃はドイツでヘルダリンが一番よく読まれてゐたのである。またそれと反対の例としては滞日中の或る独逸人（教師）の令息はギムナジウムに通ってゐたが、私が見たときはジャン・パウルを愛読し

てゐたので一驚を喫したことがある。

私はさきに歴史と地理の時間も国語教育の延長と見られると言った。それは歴史の教授法にも依るのであり、また歴史材料の選択にも依るのである。第一年級（小学五年）に歴史物語を読ませ、かたはらグリムの伝説的物語をも用ひてゐる。第二年級になって古代から歴史は始まるのであるが、第三年級（中学一年）は中世、第四、五学級で現代までが済む。第六、七、八学級（高校三年）で古代から改めて現代まで履修する。しかし歴史書をあてがひ、講義が唯一の教授形式でないように配慮することが要求されてゐたから、教材は国語教育の延長となったわけである。

ドイツの高等学校において古典語を課してゐるのは、現代外国語を課してゐるのと全く意味が異ってゐて、古典語は文化史の過程において自然にドイツ語と合成して発達した古典であることに注目せねばならぬ。古典語のうちラテン語は、あたかも我国における漢文の如く、ドイツ文化と切り離して考へることは出来ない。単なる教養を越えた直接的な結びつきをもつこと、国文と漢文の関係の如きものである。欧洲の文化を負う国において社会の中堅層がラテン語を通じてギリシヤ精神の理解を得ることは第一の課題である。高等学校の重要な目標はそれである。ここに自己形成が行はれ、これなくしては自己形成はあり得ないと考へられてゐる。従って古典語教育の中心は講読であって、ラテン語で自由作文を書かせるようなことはなかった。

ドイツは敗戦後も別段これといふ学制改革を行ってはゐないらしい。最近ドイツから日本へやって来た青年たちにもそんな気配は見えなかった、とヤーン先生は私に語った（昨年の九月）。場所は名古屋の東郊にある八事山に近頃できた綺麗な南山大学の研究室である。私はそのときヤーン先生が語った話をここに書いてこの報告文の結びにしたい。

ドイツでは国語教育が重要視されてゐるので、国語で落第点をとった生徒は上級へ進めない。（ヤーン先生は一九四〇年にドイツ高等学校の最上級を受持ってゐられたのである。）つまり外の学科がよくても国語の点が悪かったら外の点から埋め合せることが出来ないと定めてあった。ほかの学科はそれが出来るのである。一週間のうち国語の時間は二時間から四時間であったが、文法については、例へば名詞のことをノーメンと言はずにハウプトヴォルトと呼ぶようにしてゐたこと、正しい綴字を書くことに重点を置いてゐたこと、フォネティクは用ひられてゐなかったことなどが特徴である。（文法上の術語についてラテン語をやめてドイツ語を用ひるようになったのは、ドイツ語の厳清運動の一端にすぎないので、一九三三年の改革より以前からの傾向であるから姑くこれを論外として、正しい綴字法の重要視はまったく私（筆者）は同感である。西ドイツに敗戦後あたらしい綴字法の運動があって、その報道も見たが、社会がこれを黙殺したらしい。）ドイツでは綴字法の教育として書取をたびたび行ったものである。

読方の練習には特別な読本を使用した。読本はいくつも種類があって、近年になって内容も形式も変ったが、古い読本には童話、伝説、歴史上の逸話が主としてあったのに、新しいものには郷土誌や自然科学の記事が織りこまれてゐる。詩の暗誦が奨励されてゐることは昔と変らないが、此頃は幾分それも少くなったらしい。

国語の使用に熟達するために作文が課せられてゐるが、高等科に

おいては作文が生徒の実力を示す何よりの証拠と見られてゐる。教場で書かせる以外に家で作文を書いて来させるが、尋常科(高校の)で二時間、高等科で四時間を占めてゐた。作文の題を出すことあり、自由作文のこともある。

高校の中等科ごろから演説が重要な役割を占めてゐた。此頃は討論の形式も用ひられてゐるであらう。劇を上演することも学校の記念日に行はれたこともあるが、どの学校にも行ってゐる程のことではない。

中世ドイツ語は高等科で習ふ。ワルテル・フォン・デア・フォーゲルワイデの詩が最も読まれてゐた。(これは日本で古文を読ませるのに該当する。)古典のものではシラーの劇が最も読まれ、高学年でゲーテのものを読むことになってゐた。(これについては前述の教材を参照して預きたい。)どの高校にも必ず立派な図書館があって、生徒はそこで豊富な読書をすることが出来るようになってゐる。地理や歴史の時間にも、それぞれ問題が出て作文を書かせるやうにしてゐる。それは批判する傍ら文章に習熟するためである。また最上級の生徒だけには懸賞作文が設けられてゐた。

ヤーン先生の話の要点はそれだけだったと思ふ。私は先生の話を意味ふかく聞いた。私はこのごろ樗牛と鷗外を読んだ。国語は易しくすべきであるとは思ったが、樗牛や鷗外の文の気品には全く圧倒される思ひであった。いつの間にか私たちは気品のない現代文を読みなれて気品を忘れてゐたのである。国語教育にはこのことを忘れて頂きたくない。ヤーン先生の話は私にそのことを思ひ出させたのであった。

—大阪大学教授—